2—11

運動器障害のある高齢者における18か月間の運動器リハに伴う機能の推移

[1]国立障害者リハビリテーションセンター，[2]国際医療福祉大学大学院，[3]藤野整形外科，[4]川嶌整形外科病院，[5]はたのリハビリ整形外科，[6]岩井整形外科内科病院，[7]竹田綜合病院，[8]福岡クリニック，

○大熊（おおくま）　雄祐（ゆうすけ）[1]，近藤　怜子[1]，緒方　徹[1]，阿久根　徹[1]，飛松　好子[1]，赤居　正美[2]，藤野　圭司[3]，川嶌　眞人[4]，畑野　栄治[5]，稲波　弘彦[6]，本田　雅人[7]，土肥　徳秀[8]，中村　耕三[1]，岩谷　力[1]

【目的】高齢者の18か月間の運動器リハに伴うロコモ25や運動機能，疼痛部位数などの推移を調べること．

【対象・方法】LDP studyは，65歳以上の高齢者における運動器疾患に関連する身体機能低下を検証する前向きコホート研究である．全国の整形外科および整形外科附属介護保険施設において314例を対象に42項目392変数に関する測定調査を半年ごとに4回実施し，運動器疾患の要介護化過程について解析を行っている．

【解析】初回から4回目まで調査を継続できた230名を75歳未満／以上の2群に分けた．75歳未満（94例：男性32例女性62例）と75歳以上（134例：男性29例女性105例）の各々で初回と4回目調査でのロコモ25の総点および各項目得点，5種の運動機能（握力，長座体前屈，片脚起立時間，脚伸展力，百歩足踏み時間），疼痛部位数（腰背部痛，殿部痛，大腿部痛，膝痛）に差があるかをWilcoxon検定により検定した．有意水準は5%とした．

【結果・考察】75歳未満群ではロコモ25総点は有意差がなく，ロコモ項目「風呂での洗体」のみ，初回に比し，4回目スコアが有意に低かった．疼痛部位数は有意に4回目が少なく，運動機能では脚伸展力，百歩足踏み時間が4回目データが有意に向上していた．75歳以上では，ロコモ25総点は有意差なく，初回時スコアに比し4回目スコアは，ロコモ項目「頚上肢痛」，「下肢痛」，「床からの寝起き」の3項目で有意に低く（機能向上），「隣近所へ外出」，「つきあいを控える」の2項目で有意に高かった（機能低下）．疼痛部位数も有意に4回目が少なかった．運動機能は長座体前屈，脚伸展力，百歩足踏み時間では，初回時に比べ4回目データが有意に向上しており，片脚起立時間は有意に低下していた．運動器リハを継続していた高齢者は痛みや基本動作，運動機能は改善したが，社会活動などの活動性は低下した．